認定医ケースプレゼンテーション抄録

可撤式口蓋板を使用した上顎顎補綴症例

奥田 啓之

A Case of Maxillary Defect Applied for Hollow Obturator Prosthesis with Removable Palatal Portion

Hiroyuki Okuda

I. 症例の概要

患者は53歳・女性で平成4年4月に咀嚼、審美、発音障害を主訴として、大阪歯科大学附属病院口腔外科より顎義歯の新調を希望して同補綴科に転科した。

上顎の欠損状態は無歯顎、HS分類でH₅S₀D₀T₄であった(図1)。下顎に欠損はなかった。

旧顎義歯口蓋面は実質欠損に沿って陥没し、咀嚼時に食物が停滞していた。また口腔前庭を含めた前歯部の豊隆不足のため審美的に不良で、床内面には粘膜調整材が貼布されていた(図1)。

II. 診断および治療方針

上顎の歯および顎欠損、義歯の不適合による咀嚼、審美、発音障害と診断した。失われた形態と機能の回復を目的として顎義歯を作製し、特に口蓋面は形態の異なる口蓋板を数種類作製し、顎義歯に接合して経過観察を行い最も良好な経過のものを採用することとした。

III. 治療内容

個人トレーにて健側の辺縁形成を行い、アルギン酸印象材にて最終印象を行った。咬合採得後、実質欠損に合わせて口蓋部分を凹ませた蠟義歯を作製した。

口蓋面形成の材料としてソフトプレートワックス(ジーシー社製)、およびパテタイプシリコン印象材(EXAFLEX, ジーシー社製)を用意した。また舌背

押し付けと水の嚥下を口蓋面形成の動作とした。

蠟義歯試適時、ソフトプレートワックスは温湯中で軟化させて、パテタイプシリコン印象材はキャタリストのみをそれぞれ口蓋面凹部にみだし、上記動作を行わせて口蓋面形態を採得した。得られた種々の口蓋面形態のなかから形態の異なる3種類を選び、これをもとに加熱重合レジンにて口蓋板を作製した(図1)。完成顎義歯は実質欠損相当部を中空にして可及的に軽量化を図った。

3種類の口蓋板を完成顎義歯に即時重合レジンで接合し、それぞれ2~3週間装着し経過観察を行った。経過観察中、装着感、発音、咀嚼についての問診と、会話明瞭度検査¹⁾を行い、最も良好な経過のNo.3口蓋板を本顎義歯の口蓋面とした(表1)。

顎義歯床内面実質欠損相当部には粘膜調整材を貼布して動的印象を採得した。良好な形態が得られたところで加熱重合レジンに置換し、顎義歯を装着した。

IV. 経過観察と考察

新顎義歯装着により、口蓋部分の食物の停滞は消失し会話も明瞭になった。また審美的にも改善された。

経過とともに顎義歯中空部分に液体が貯溜したため、口蓋板の後方接合部に小孔を設け液体を排出するように改良した。しかし、術者の清掃が必要なこと、不潔な顎義歯内部からの感染による涙嚢炎の発症などの問題が生じた。そこで、顎義歯の衛生面を考慮し、磁性アタッチメントを応用して口蓋板を可撤式にした(図2)。

顎義歯の装着から4年後、口蓋板辺縁が菲薄なため着脱によって摩耗し、顎義歯との間に隙間が生じた(図2)。このため、舌で容易に脱離するため新たに顎

大阪歯科大学欠損歯列補綴咬合学講座
Department of Removable Prosthodontics and Occlusion,
Osaka Dental University

図1 A: Maxillary defect before treatment (Study model)
B, C: Old prosthesis
D: Three different types of palatal portion (No. 1: narrow and deep, No. 2: narrow and shallow, No. 3: wide and shallow)
A: 治療前の上顎欠損状態 (考用模型)
B: 旧顎義歯咬合面観
C: 旧顎義歯後方面観
D: 3種類の口蓋板とその陰型
左から No.1: パテ×舌背押し付け, No.2: パテ×水の嚥下, No.3: ソフトプレートワックス×舌背押し付け

表1 Each palatal portion (No. 1~No. 3) with prosthesis were worn during 2 or 3 weeks. Then swallowing, chewing, fitness, and pronunciation were observed. No. 3 palatal portion was the best progress. 経過観察時の問診事項と会話明瞭度検査の結果

口蓋板	No. 1	No. 2	No. 3
嚥下	可能	可能	可能
食塊の停滞	米飯が停滞	なし	なし
安静時の装着感	良好	かなりせまい ガムが貼りついている感じ	良好
発音	シ→チ, ヒ	全体的に困難	良好
会話明瞭度	1	2	1

義歯を作製することとした。

個人トレーにて健側の辺縁形成を行い、実質欠損部は粘膜調整材で、その他の部位はアルギン酸印象材にて最終印象を行った。咬合採得、蠟義歯試適を行った後、口蓋面を解放した中空顎義歯を作製した。

口蓋面の形成は、完成顎義歯上で行うこととした。粘膜調整材を新顎義歯中空部分にみだし、現顎義歯を参考に形成を行った。同時に粘膜面実質欠損相当部にも粘膜調整材を貼布し、食事時以外に装着して口蓋面形態の確認と実質欠損部の動的印象を行った。

1週間後、口蓋面の形態に不具合のないことを確認して、辺縁部を十分に厚くした可撤式口蓋板を作製した(図2)。顎義歯粘膜面実質欠損部は加熱重合レジ

図2 A, B: Some problems occurred with progress. Palatal portion was changed from fix type to removable type with magnetic attachment
C: 4 years after new prosthesis setting. A gap occurred for abrasion
D: 3 years after re-making prosthesis. No gap has occurred
A, B: 磁性アタッチメントを応用して口蓋板を可撤式とした顎義歯
C: 顎義歯装着4年後、摩耗により生じた隙間
D: 改良新顎義歯装着3年後の口蓋板辺縁の状態

図3 Functional evaluation for final prosthesis wearing 3 years
A: EMG records during gumi chewing
B: The masticatory ability of final prosthesis improved from old prosthesis (□: old prosthesis ■: final prosthesis)
改良新顎義歯装着3年後における機能的評価
A: グミ咀嚼時の筋電図
B: 新旧顎義歯における摂食可能食品アンケート²⁾による咀嚼能力の比較 (□: 旧顎義歯 ■: 新顎義歯)

ンに置換し、平成9年8月改良新顎義歯を装着した。

改良新顎義歯装着から4年経過したが、審美的にも機能的にも良好に経過している(図3)。本症例では、可撤式口蓋板を用いることで顎義歯の衛生面で良好な結果を得た。現在口蓋板辺縁の摩耗は生じていないが、今後も注意深く経過観察をしていきたいと考える。

文 献

- 1) 岩井正行, 佐渡忠司, 古田 勲. 上顎欠損者の構音障害の語音発語明瞭度による評価と顎義歯による回復. 顎顔面補綴 16: 9-16, 1993.
- 2) 平井敏博, 石島 勉, 越野 寿ほか. 顎補綴治療における咀嚼機能評価法について. 顎顔面補綴 19: 42-52, 1996.